

新島八重 知られざる素顔

吉海・同女大特任教授が著作



●新島八重の生涯をまとめた新著を書いた同志社女子大特任教授、吉海直結さん(上京区で) ●結と婚当時の新島襄(右)と八重(同志社女子大提供)



の著作を書き上げた。著作では、86年の生涯を会津時代、襄との結婚生活、死別後の3部で構成。全編を通して史料を多く引用し、ほぼ年代順に約1000項目の細分した節を並べて合間に13編のコラムを配置した。

「鶴ヶ城籠城」「襄の最期」篤志看護婦(師)としての八重」といった、八重自ら生前によく語ったエピソードに加え、女学校の教師や英訳本の活字をひろう植字工もした「職業人」、裏千家の「茶人」、折に触れて優れた短歌を詠む「歌人」、晩年まで郷里を思い続けた「会津人」など、様々なことに挑戦した八重の人物像を掘り下げている。

あす講演会

9日午後2時から、同志社女子大今出川キャンパス(上京区)で、吉海さんが八重について話す講演会が開かれる。問い合わせは同大学史料センター(075・251・4200)へ。

「茶人」「会津人」… 多数史料から掘り下げ

自由奔放な悪妻烈婦」。同志社を創立した新島襄の妻、新島八重の(悪いイメージ)に隠された素顔を、同志社女子大特任教授の吉海直結さん(70)が著作「定本新島八重 伝 倅不羈の女」(武蔵野書院)にまとめた。激動の幕末から昭和までを生き抜いた歩みを丹念にたどり、「従来と違う姿を残せた、八重の決定版」と話す。(矢沢寛茂)

新島八重 1845〜1932年。会津藩(現・福島県)の砲術師範の家に生まれ、戊辰戦争では会津若松城(鶴ヶ城)に籠城、官軍と戦った。1876年に襄と結婚し、襄の死後には日清、日露戦争の看護活動に従軍し、皇族以外の女性では初めて叙勲を受けた。襄は八重を「ハンサム・ウーマン」と評している。

主人公となったNHK大河ドラマ「八重の桜」(2013年)では力強く生きるヒロインとして描かれた。しかし、夫婦が米国流にならない、夫を「ジョー」と呼び捨て、人力車にレディーファーストで先に乗り込む姿は、男尊女卑の当時は悪評や好奇の目にさらされ、現在も悪妻のイメージがつきまとう。

学で教える。八重が口述したガリ版刷りの回想録を発売し、2000年に紹介。大学が設立した八重の研究会の座長を務め、12年には「新島八重 愛と闘いの生涯」を出版した。

このほか、同志社英学校で学び、かつて反目した徳富蘇峰と仲直りして終生の交遊を結んだことや、銭湯の一番風呂を好んだことなど、等身大の八重が垣間見える話題を満載した。吉海さんは「断片的にしか分かつらず、空白の期間もあるが、伝記と呼べるくらいのものでできた。襄と八重の志を継承するためにささやかな答えになれば」と結んだ。